

香港における『不如帰』の映画化について

—新資料の発見を中心に—

A study of the Hong Kong movie Why Not Return:

About the newly discovered brochures

郷波、楊文瑜

復旦大学、上海財経大学

要旨

2019年に、論者は『新胡不帰（1951）』と『胡不帰（1958）』の香港映画パンフレットを入手した。いずれも現在に至るまで、『不如帰』研究において紹介されることがない資料である。とりわけ1951年に公開された『新胡不帰』は、フィルムも現存していないため、詳細もわからず、従来ほとんど言及されることがなかった。パンフレットに掲載されていたのは、『新胡不帰』の俳優に関する紹介や、「情僧哭墳」、「風雨訪情僧」など4つの主題歌の歌詞と曲や、撮影の逸話、内容の紹介などである。映画『胡不帰（1958）』のパンフレットには、作品の成立について詳細な説明が載せられていた。映画に出ている新曲「寒閨怨」の楽譜と歌詞や、クライマックスの「哭墳」の抜粋、そして全作品の内容の紹介と映画、俳優に関する文章が載せられている。

1940年代に入ってから、新劇『不如帰』の影響を受けた粵劇『胡不帰』は相次いで香港で映画化され、脚本家たちは『不如帰』のプロットは、比較的自由に削ったり、膨らませたりした。これらの作品は、原作の内容や表現を忠実に再現することより自国の読者の受容を考慮して、原作に新たな生命力を吹き入れた。徳富蘆花の『不如帰』は国境を越え、翻訳や翻案を通して豊かになる作品であり、近代の東アジアにおける「世界文学」の成立に関しては代表的な好例である。

キーワード

『不如帰』、『胡不帰』、『新胡不帰』、香港映画、受容

香港における『不如帰』の映画化について -新資料の発見を中心に-

郷波、楊文瑜
復旦大学、上海財経大学

1. はじめに

近代になって、出版や交通などの発達によって、翻訳事業は盛んに行われるようになった。その結果、デイヴィッド・ダムロッシュが述べているような意味で、「世界文学」の形成が促進され、同時に「世界文学」は近代の文化や思想と密接な係わりを持つに至った。いうまでもなく、近代における文学の越境と流通は必ずしも単純なルートを辿って受容されたものではなく、2つの言語の間における翻訳行為もあれば、3つ以上、もしくはそれ以上の複数の言語を経由して受容された場合も多くある。その代表的な例が重訳である。たとえば、まずフランス語やドイツ語などの言語から英語に訳され。その後日本語を経由して、中国語や朝鮮語などアジア諸国の言語に訳されていくといったものである。

近年、論者は日本近代小説『不如帰』がどのような経路で中国に受容されたかを研究し、受容の事情を明らかにした。1908年に、林紓と魏易が訳した最初の中国語訳『不如帰』は徳富蘆花の原作を参照しながら『不如帰』の英訳である『Nami-Ko』を訳したものだ。その後100年の間に、作品の重訳、新劇の上演、映画化、地方劇化など、『不如帰』は中国で新たな生命力を得て、今日まで読者に享受されている。

読者及び受容環境の力学を明らかにしなければ、文学作品がさまざまなメディアを通して流通し受容された実態を把握することはできない。しかし、作品の変容をめぐって、どのような方法論を用いて論じるべきか、新しい課題となってくる。

かつて、H・R・ヤウスは『挑発としての文学史』のなかで、読者の重要性を強調していた。

文学作品は、それ自体で成り立っている客体などではなく、どの時代のどの観察者にも同様の姿を示すことはない。文学作品は記念碑ではなく、独自のその時代を超えた本性を開示するものなどではない。それはむしろ、総譜（パルティトゥーア）のようなもので、読むたびにいつも新たな共鳴をおこすように作られていて、その共鳴者がテキストを素材としての言葉から解き放ち、アクチュアルな存在、「語りかけると同時に、それを聞く能力をもつ対話者を想像しないではおかない言葉」にするのである。¹

¹ H・R・ヤウス（2001）『挑発としての文学史』（轡田収訳）岩波現代文庫、35

作品の価値はそれ自体によって作られた閉鎖的な空間で判断されるものではなく、「総譜のようなもので、読むたびにいつも新たな共鳴をおこすように作られ」るもののはずである。ヤウスが提起したのは、読者の立場から作品を読み直すという、価値観の転倒だった。こうした読者論の視点は、ひとつの言語圏内においてというだけでなく、国境を越えた圏域においても適用可能なものである。国境を越えて伝播していった文学にも、当然通用するものであろう。

こうした受容理論をふまえて「世界文学」という概念を煉り直したデイヴィッド・ダムロッシュは「世界文学」とは何かという問いに対して、次のように定義をしている。

- 一、世界文学とは、諸国民文学を楕円状に屈折させたものである。
- 二、世界文学とは、翻訳を通して豊かになる作品である。
- 三、世界文学とは、正典のテキスト式ではなく、一つの読みのモード、すなわち、自分がいまいる場所と時間を越えた世界に、一定の距離をとりつつ対峙するという方法である。²

従来の比較文学の視点で考えると、発信源は正典とされた作品であり、円の円心となっている。作品世界の秩序はこのような1つの正典を中心に広がる円形のように成立している。しかし、文学の流通と再生産は単純な複製と同じようなものではない。受信側の力学を無視すると、「読者」が「総譜」に共鳴しながら新たに創造した事実も見えなくなるのではないか。つまり、正典と翻訳（翻案）は発信源と受信源という2つの焦点となって、「世界文学」の楕円形を形作るようになる。受信源はただ受動的な立場ではなく、新たな焦点となり、新しい言語圏の発信源となり、「正典」あるいは「総譜」を新鮮な形で新しい読者群に提供し、原作を豊かにする役割を果たしているのである。

本論文では、中国で映画化された徳富蘆花の『不如帰』を取り上げ、新発見資料を紹介しつつ、1950年代の香港において『不如帰』がいかに変容したのかを究明することにしたい。

2. 中国における『不如帰』の映画化

近代東アジアにおいては、『不如帰』がさまざまなメディアを通して受容されていた。1898年1月から翌年5月まで『国民新聞』に連載された『不如帰』は、20世紀の初頭に中国と朝鮮に渡り、受容されたのである。

² デイヴィッド・ダムロッシュ (2011) 『世界文学とは何か』(秋草俊一郎ほか訳) 国書刊行会, 432

1912年に趙重桓が『不如帰』を朝鮮語に訳し、同じ年に鮮于日の『杜鵑声』と、金字鎮の『榴花雨』という2つの翻案作も誕生した。1912年3月、趙重桓と伊白南は劇団「文秀星」を作り、戯曲『不如帰』を上演した。その後、劇団「青年派」(1912)、「聚星座」(1927)、「土月会」(1929)、「朝鮮演劇社」(1930)、「太陽劇場」(1934)は演劇『不如帰』や翻案作『榴花雨』を演じた。

20世紀の初頭に魯迅をはじめとする留学生が『不如帰』を読み、興味を示した。「魯迅が東京に住んでいたとき、一度日本語から訳そうと思っていたが、結局そのままにして手をかけなかった。」³という証言を弟の周作人は残している。また、1908年に本郷座で『不如帰』が舞台化されたとき、楊少雲や滄海などの中国人が観劇し、その内容と感想を詩歌で残した。1908年に、『不如帰』の最初の中国語訳が誕生した。林紓と魏易の翻訳は、日本語版を参照しながら英訳『Nami-Ko』から重訳したものだと考えられる。1911年に日本で『漢訳不如帰』が出版され、訳者は日本人の杉原幸である。全訳ではないが、1938年に銭稻孫は小説の第1章を昆曲風に翻案した。上述した3つの翻訳、翻案は古語体である。『不如帰』の初めての口語体訳は林雪清が1933年に完成し、亜東図書館によって出版されたものである。その後1937年に上海大通書社によって殷雄訳『不如帰』も出版されたが、表現から見れば、林紓訳の口語体翻案である。留学生の陸鏡若、馬絳士たちが東京で上演した『不如帰』を中国の舞台に移植し、1914年から上海で20回以上演じたこともある。1926年に『不如帰』は中国で初めて映画化された。国光公司の無声映画だった。

しかし本論文で分析する『不如帰』の映画化は、この1926年に制作された無声映画ではない。馮志芬は演劇『不如帰』からヒントを得、粵劇『胡不帰』の脚本を作った。1939年に、薛覺先、上海妹たちがそれを香港で初演した。地方劇の上演は今日まで続けられており、広東語方言地域で広く知られている名作である。翌年に、薛覺先主演の映画『不如帰』は上映された。表でまとめた情報を見れば、1940年から、広東語で制作された戯曲映画は7本もあり、映画という20世紀の新しいメディアで新たな生命力を得て、広く受容されたことがわかる。

³ 周作人(1934)「閑話日本文学」(梁澁武訳)『国聞週報』1-38, 2

香港における『不如帰』の映画化について
 -新資料の発見を中心に-

(表 1 : 香港で制作された『胡不帰』映画)

タイトル	主演	監督	公開年
胡不帰	薛覺先、黄曼梨	馮志剛	1940年
胡不帰下巻	薛覺先、黄曼梨	陳皮	1947年
新胡不帰	何非凡、白燕	吳回	1951年
歌唱胡不帰	梁無相、羅麗娟	吳回	1952年
新馬仔胡不帰	新馬師曾、周坤玲	陳皮	1953年
胡不帰	芳艷芬、林家声	蒋偉光	1958年
七彩胡不帰	陈宝珠、萧芳芳	李鉄	1966年

香港映画資料館などで調査した結果、7本の映画のうち、1953年以前に制作された4本のフィルムは散逸してしまっていた。『香港電影史話』などで監督や主演俳優、あるいは宣伝用スチール写真などを確認することができるだけである。

『テキストの旅程——近代日本小説「不如帰」の中国での受容』という単著のなかで、論者は現存の3つの映画を中心に映画という形で、『不如帰』が中国でどのように受容されたのかを分析したことがある。

(図 1 : 映画パンフレット『新胡不帰 (1951)』)



(図 2 : 映画パンフレット『胡不帰 (1958)』)



同書を刊行した後も、論者は資料収集に努めている。2019年に偶然にオンライン古本屋で稀覯本を発見し、『新胡不帰(1951)』と『胡不帰(1958)』の映画パンフレットを入手した。いずれも現在に至るまで、『不如帰』研究において紹介されたことがない資料である。とりわけ1951年に公開された『新胡不帰』は、フィルムも現存していないため、詳細もわからず、従来ほとんど言及されることがなかった。以下に、これらの映画パンフレットを分析し、1850年代において『不如帰』がどのように受容され、またどのように変容していったのか、明らかにしたい。

3. 映画『新胡不帰(1951)』の変容

3.1 粵劇『胡不帰』と映画『新胡不帰』の成立

粵劇『胡不帰』は新劇『不如帰』に基づいて脚本化されたものである。登場人物の名前や地名は中国のものに置き換えられており、また対戦国が変えられていたり、ヒロインが死亡を偽って夫の本心を試す内容が加えられていたりするなど、脚本家馮志芬の創作とみなしうる部分も存在する。しかし、大筋において、徳富蘆花の小説を踏襲した内容であるとはいえる。

趙顰娘は文萍生と恋愛していたが、継母に嫌われ、家から追い出された。文萍生は趙顰娘を家に連れて行って、母親に結婚を申し込んで、無理矢理に納得させた。文萍生の親戚に方三郎と方可卿兄妹がいる。方三郎は趙顰娘のことが好きで、方可卿は文萍生との結婚を望んでいた。文萍生と趙顰娘との結婚で兄妹二人は絶望し、医者に賄賂を渡して文萍生と趙顰娘を離縁させる陰謀を立てた。医者は文萍生の母親に趙顰娘が結核にかかったと信じ込ませ、別邸に移住させた。その時、遼王が中原に侵略してきたため、軍人の文萍生は戦場に赴いた。方三郎は別居中の趙顰娘を誘惑したが、失敗した。それを恨んだ方三郎は文萍生の母親を唆し、文萍生夫婦を離縁させようとした。文萍生が戦場に赴いた後、母親の文方氏はすぐ趙顰娘に離縁を伝え、家を追い出した。戦場に行った文萍生は手柄を立てて凱旋したが、妻が不運にも追い出されたことを知り、探しに出かけた。趙顰娘は夫の文萍生の気持ちを確かめるために、みずからを死んだことにして、墓も作らせた。そして文萍生を墓前に来させて、その心境を語らせた。その結果、趙顰娘は感動し、夫に会うために出てきた。夫の文萍生は母親の意向に背くことなく、趙顰娘と復縁することができたのである。

1951年に撮影された映画『新胡不帰』は李丹萍によって脚本化されたものである。パンフレットに掲載されていたのは、『新胡不帰』の俳優に関する紹介や、「情僧哭墳(恋を偲ぶお坊さんがお墓の前で涙を流す)」、「風雨訪情僧(風雨のなかをお坊さんを訪ねる)」など4つの主題歌の歌詞と曲や、撮影の逸話、内容の紹介などである。まずこの作品が創作される至った経緯と、作品の内容について見てみよう。映画概要の「前書き」で李丹萍はこう解説している。

香港における『不如帰』の映画化について

—新資料の発見を中心に—

友人馮志芬は粵劇界の有名な脚本家である。彼の創作で名作として数えられるものは100本以上もある。そのなかで『胡不帰』が一番評価されている。(中略) 今回の映画も同じ主題を扱っている。この映画のヒロインは、悪役の姑にいじめられる柳玉英である。『胡不帰』の趙顰娘と同じ境遇で、相憐れむべき存在である。この小説に適切なタイトルをなかなか見つけられないため、「新胡不帰」というタイトルをつけた。読者諸君に断っておきたいが、『新胡不帰』の内容は完全に馮君の『胡不帰』と関係はないのである。『胡不帰』を示唆していると推測されてしまうのであれば、恐縮に思う次第である。⁴

「前書き」から分かるように、李丹萍は馮志芬の『不如帰』を意識しながら、姑と嫁との衝突を主題にしたのである。「関係がない」とは書いているが、題名の付け方から見ると、読者に『胡不帰』を想起させようとする策略すら読み取れてしまう。

『香港電影史話』に映画の概要が記録されている。入手したパンフレットには、1500字くらいのより詳しい概要が掲載されていた。

(表2: 『新胡不帰』 (1951) の構成)

1. 母親を偲ぶ	青年孔紹剛は幼年期に母親に死別し、継母林氏に嫌われている。ある日、紹剛は母親の生前の写真にバラの花を献げたが、花は継母に捨てられた。もめているとき、異母兄弟が入ってきた。
2. 兄弟	孔紹剛に弟の紹強と妹の紹芬がいる。二人とも紹剛に同情し、母親の仕業に納得していない。
3. 縁談の陰謀	孔紹剛には恋人がいる。柳玉英という裕福な家の娘である。柳家は縁談の話をしてくるが、継母林氏は玉英を自分の息子の嫁にしたいため、仲人を騙して縁談を認めた。
4. 弟の恋愛	弟の紹強は馮慧茹を愛している。馮慧茹は兄の馮堅と支えあいながら暮らしている。孔紹強と馮慧茹は音曲が好きで、よく郊外に行って歌を歌う。
5. 結婚	結婚の日に、柳玉英は結婚相手が弟の紹強であることに気づき、驚いた。紹強は兄の孔紹剛から愛する人を奪いたいとは思わなかったため、孔紹剛を花嫁の部屋に導き入れて、みずからは書置きを残して出て行ってしまった。
6. 誤解と事故	紹強は立ち去ったが、途中馮慧茹の兄の馮堅に出会った。馮堅は紹強が妹を裏切ったと信じ、喧嘩した。紹強は倒れて、頭を石にぶつけ、血を流した。

⁴ 李丹萍「前書き」『新胡不帰』(小冊子、出版年月不詳)

7.紹強の失踪	下人の阿福は意識不明の紹強を見つけた。紹剛と玉英が新郎新婦の部屋にいるのを見たので、紹強が兄に嫁を奪われ殴られたと勘違いした。阿福は紹強を抱えて孔家を離れた。
8.虐待	紹剛の父親孔道山と継母が駆けつけてきた。紹剛と玉英との結婚を見て、継母の林氏は激怒し、二人が共謀で紹強を殺害したと思い込んだ。その後玉英を虐待し続けた。
9.紹強の出家	馮堅は戻り、紹強を抱えた阿福と出会った。二人は紹強を救助した。目覚めた紹強は紹剛と玉英を結婚させた真相を語り、馮堅は謝った。自分の家庭に失望した紹強は雲浮寺に出家した。
10.紹剛の家出	結婚当日、紹剛は家を離れ、しばらくお寺で暮らしている。
11.見舞い	虐待を受けていた玉英は病気で倒れた。紹剛は見舞いに行ったが、林氏に見つけられ、紹強を殺害した犯人として警察に連れて行かれそうになったとき、馮堅が来て、紹強が出家している真実を語った。林氏は懺悔した。
12.誘い	紹剛、玉英と馮慧茹は雲浮寺に行き、慧茹はお寺の外で一曲を歌う。三日以内に蓬萊旅店に来なければ手遅れになると紹強に伝えた。
13.死を偽る	紹強は蓬萊旅店に赴いた。慧茹は死んだと偽って、紹強の心を試す。
14.大団円	紹強は偽のお墓の前で「情僧哭墳」の歌を歌った後、慧茹はお墓の後ろから姿を現し、一緒になった。

比較してみれば分かるように、映画『新胡不帰』は、登場人物も内容も粵劇より複雑になっている。姑と嫁との衝突という主題は両作品に共通している部分である。粵劇でヒロインの継母と姑が担っていた役柄は孔紹剛の継母林氏ひとりが担うことになる。また趙響娘の役柄は、玉英と慧茹の二人によって分担される。他に粵劇『胡不帰』と映画『新胡不帰』で共通しているところとしては、映画の後半になって玉英が姑の虐待に耐えられず倒れる部分、また女が死んだと偽って、恋人の男を墓前に来させて心境を語らせる部分、そして大団円の部分などが挙げられる。

しかし、映画『新胡不帰』では、粵劇にあった賄賂を渡す場面、誤診の場面、別居の場面、また戦争に関するエピソードはすべて削除されている。逆に付け加えられた部分としては、警察が登場する場面や紹強が出家する部分、そして紹剛が僧侶に変装する部分などである。

3.2 何非凡と張活游と映画『新胡不帰』

映画『新胡不帰』の主演は何非凡（孔紹強）、白燕（柳玉英）、張活遊（孔紹剛）、小燕飛（馮慧茹）、林妹妹（林氏）である。

関連資料⁵によると、何非凡（1919-1980）は有名な粵劇のスターである。本名は何賀年、何康琪であり、広東省東莞市生まれ、16歳から粵劇の俳優となり、1947年ごろ、「非凡響劇団」を創立した。楚岫雲と『情僧偷到瀟湘館』を共演し、連続して367回満員公演の記録を作った。広州でもほかに、『十女凡心』（紅線女と共演）、『一道眉月伴寒衾』（芳艷芬と共演）、『碧海狂僧』（鄧碧雲と共演）、『風雨泣萍姫』（余麗珍と共演）などの名作もある。20世紀50年代から1962年まで映画主演として活躍し、80以上の映画に出演したという。1961年から1965年まで香港粵劇組合「八和会館」会長を務めていた。

何非凡の代表作は『情僧偷到瀟湘館』と『碧海狂僧』であり、出家した後も昔の恋を偲ぶ「情僧」というイメージが歓迎されていたため、「情僧何非凡」と呼ばれるまでに至った。

粵劇『胡不帰』には主人公が出家する設定はない。何非凡のための設定と考えられる。映画のなかで、何非凡は「情僧哭墳」、「龍鳳花燭為誰紅」、「水辺情歌」を歌う。「情僧哭墳」という歌は粵劇『胡不帰』の結びとほぼ一致しており、何非凡の「情僧劇」の舞台経験を十分発揮できるところであろう。

兄の孔紹剛を演じる張活遊（1909-1985）は映画俳優である。本名は張幹裕であり、広東省梅県生まれである。元々は粵劇の俳優であったが、のちに映画主演として活躍しており、出演した映画やテレビドラマは250ほどあった。1940年に公開された映画『胡不帰』では粵劇『胡不帰』の初演者薛覺生が主演を務めたが、張活遊は脇役の方三郎を演じた。

1954年に、張活遊は映画『空谷蘭』の主演を務めた。『空谷蘭』は黒岩涙香訳『野の花』を脚本化されたものである。論者の研究で、『野の花』の原作がバーサ・エム・クレイ作『A Woman's Error』⁶であることが明らかとなった。1925年に上海で無声映画『空谷蘭』が公開され、1934年には有声映画として公開された。1940年に香港中南影片会社が再び『空谷蘭』を撮影した。1954年に張活遊が主演を務めたのは4回目の公開であった。『空谷蘭』の後半に主人公の息子が継母にいじめられ、産みの母の写真を見て、泣きながら訴える設定は映画『新胡不帰』に襲用されている。

⁵ 香港粵楽研究中心（1994）『紀念何非凡没後14年』、崔光明（2000）『紀念何非凡没後20年』

⁶ 楊文瑜・鄒波（2016）『『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述に関する考察』『東アジア日本語教育・日本文化研究学会』19号、175-196

映画『新胡不帰』は何非凡の「情僧劇」を主眼にし、粵劇『胡不帰』の姑と嫁との衝突や、墓参りと大団円の設定を応用した作品である。『新胡不帰』パンフレットには、映画の梗概や、俳優の紹介、4曲の歌の歌詞と曲譜のほかに、読者の興味をそそる撮影中の逸話や、近日中に公開される映画の紹介も載せられていた。紹介されていた映画は、ハリウッド映画『Royal Wedding』、朝鮮戦争映画『高麗火海』とカンフー映画『陸阿采』だった。

4. 映画『胡不帰（1958）』の変容

4.1 映画『胡不帰（1958）』の成立と構成

1958年に上映された『胡不帰』は植利影業会社の映画作品である。古代衣装の白黒映画であり、広東語戯曲映画『胡不帰』シリーズの6本目であった。公開日は1958年4月23日、上映時間は110分である。監督は蔣偉光、主演は芳艷芬、林家声、半日安などがつとめた。

先に述べたように、1958年版のフィルムは現存している。今回発見されたパンフレットには、映画『胡不帰（1958）』の成立について詳細な説明が載せられていた。パンフレットに同時期に公開されていた映画『姑縁嫂劫』、『花債状元還』、『正徳皇夜探龍鳳店』の宣伝ポスターが掲載されており、その直後から映画『胡不帰（1958）』に関係する内容となる。映画に出ている新曲「寒閨怨」の楽譜と歌詞や、クライマックスの「哭墳（お墓で泣きながら歌う）」の抜粋、そして全作品の内容の紹介と映画、俳優に関する文章が載せられている。文章は5本ある。女優秦小梨にインタビューしたものと、彼女の新作映画『肉山蔵姐己』の紹介もあり、「芳姉と蔣偉光が力を合わせて『胡不帰』を制作」、「『梁祝恨史』の次に芳艷芬と林家声が『胡不帰』を主演」、「芳艷芬が結婚する前の多忙な状況を語る」という『胡不帰』に関する3つの文章が掲載され、映画の成立や主演者に関する情報を知ることができたのである。映画が制作されるに至った経緯については、次のように記されていた。

芳姉⁷と蔣偉光が力を合わせて『胡不帰』を制作

数ヶ月前に、香港の映画界では戯曲の王と呼ばれる『胡不帰』の映画化をめぐる4つの会社が争い、大きな話題となった。結局不愉快なことにならないように、皆映画の制作をやめてしまった。珍しい謙譲な精神だ。

この間、植利影業公司（映画会社）は大同貿易会社から同意を得て、この戯曲の原作者馮志芬の映画脚本を撮影することになった。会社の1958年最新作として、今はすでに準備の段階に入っている。

⁷ 「芳姉」は女優芳艷芬の愛称である。

香港における『胡不帰』の映画化について

—新資料の発見を中心に—

「植利」会社の『胡不帰』はすべて舞台の形を取り、銅鑼と太鼓の伴奏で戯曲を演じる。したがって古代服装で戯曲を撮影することに堪能な名監督蔣偉光に監督の仕事を頼んだ。これは『重見月団円』以来、芳艷芬と蔣偉光が協力して制作された2作目の作品である。

プロデューサーである林偉が記者に話したように、『胡不帰』には原作の精髓をできる限り残し、しかも有名な作曲家潘一帆に新しく歌詞を作ってもらい、音楽家粵生に最新の小曲を多数作ってもらった。もう1つ注意すべきことは、すべての歌詞は中国の伝統楽器で伴奏し、映画に東方の色彩を彩らせているということである。ほかの舞台演出以上に現実味を持ち、人の心を動かす力を持っている。映画を鑑賞すれば切実な感じを抱くようになる。

『胡不帰』の主演者も先日決まった。悲劇花旦王（伝統戯曲で若い女性に扮する役の女王）芳艷芬が趙顰娘を演じ、薛派（名優薛覺先が作った流派）直伝の林家声が文萍生を演じ、粵劇で最初に姑を演じた半日安も出演し、鳳凰女が可卿を演じ、許英秀が方三郎を演じ、黄楚山が趙顰娘の父親を演じる。立派な俳優陣がそろっていると見えよう。⁸

この短文から分かることは、『胡不帰』は1940年にはじめて映画化されてから、すでに10数年が経っていたが、その人気は衰えていなかったということである。4つの会社が制作権利を争ったということが、それを証明している。また映画は粵劇をそのまま演出したのではなく、内容や登場人物の設定は原作と一致しているほか、変更されたところもあり、新しく作られたセリフや歌も入っている。女優芳艷芬は当時非常に人気を博していたため、彼女が主役となっている。文章に「立派な俳優陣」と書かれているのももつともである。半日安は粵劇『胡不帰』初公開の時から姑を演じており、舞台経験の豊かな俳優であった。また、脇役の方可卿を演じる鳳凰女⁹も、父親を演じる黄楚山¹⁰も名優である。1947年から、前述した何非凡の劇団で脇役の「花旦」役をつとめ、何非凡、芳艷芬、楚岫雲たちと名作『情僧偷到瀟湘館』を演じたことがある。

パンフレットに掲載された『胡不帰』の「本事（概要）」は粵劇とほぼ一致している。しかし『胡不帰（1958）』で新しく付け加えられた内容も多くある。第一、粵劇では趙顰娘が家を追い出される場面から始まる。しかし映画『胡不帰（1958）』冒頭の部分では別居を強いられた趙顰娘が萎れて散った花々を見て感傷的になる場面から始まる。「花の瘦せた影を見れば、我が病を憐れむに似ている。簾を巻き上げようにも、

⁸ 『新胡不帰』（小冊子、出版年月不詳）

⁹ （1925-1992）粵劇の名女優。2番目の「花旦」や主役の「花旦」をつとめる。1950年から1968年まで250本以上の映画に出演した。

¹⁰ 1932年から映画に出演し、1966年最後に出演した『臙脂魂』まで500本以上の映画に出演した。代表作に『断腸花』、『永遠なる微笑』、『万劫鸳鸯』、『清明時節』などある。

その力さえもう残されていない。」や「花より薄命だと心を痛めた。」と歌った。女召使の春桃は趙顰娘に風邪をひかないように注意を与えた。「奥様、感傷的になる必要はありません」と言い、趙顰娘が痩せてしまったと伝える。趙顰娘は悲しく思い、姑に自分の痩せ衰えた姿を見せたくないため、化粧して取り繕おうとした。すると姑の文母が登場する。趙顰娘が化粧しているところを見たら、腹が立った。怒られた趙顰娘は「こんな小言に耐えられない。心は動転して静まらない。」と歌い、気絶して倒れそうになる。それから、「頭に幻の影が残り、心の底に昔の情けを念じる」と歌いながら、家を追い出された回憶に入る。

その後の場面は粵劇とだいたい同じ構成と内容で上演されている。にもかかわらず、改変を施された部分も多少見られる。たとえば趙顰娘の父親は気の弱い人物であり、後妻が娘を方三郎に結婚させることに反対できなかった。趙顰娘は「老父を哀れむ。温情少なく、継母にしたがって無理強いして、私を結婚させようとした。幸いなことに文萍生にこの暗黒な家庭から連れだしてもらえた。」と歌った。そして、原作に登場している姑は冷酷な人であるが、映画の方は少し人情味のあるように変えられている。彼女は嫁の趙顰娘が病気にかかったことを知り、回復するように先祖に祈る場面がある。また付け加えられた部分もある。離縁された趙顰娘は春桃と夜道を歩み、「艱難辛苦や道のりは長い。夜は長く、風も寒い。」や「天もまた美女を妬むのかと恨みの一言でも言いたくなる。わからない、私の家がどこなのか。雁が巣を失って、帰れなくなってしまふのと同じこと。」と歌った。実家に戻る気がないため、廃れたお寺で一夜を過ごす。翌日、春桃が趙顰娘の父親を見つけ、娘のことを同情している父親は実家に戻るよう誘ったが、断られた。そして娘に家を借りて住ませ、医者も呼んであげた。粵劇では趙顰娘の父親はあまり登場していない。映画では文萍生が凱旋した後、歓迎の宴会に趙顰娘の父親も現れてきた。彼は趙顰娘が病死したことと、お墓の所在を文萍生に伝える重要な役割を担っていた。

以上のように、『胡不帰（1958）』では粵劇の構成と内容を忠実に再現しながら、多少改編、創作の部分をつけ加えた。俳優の人気度によって登場する場面やセリフを増減しているところも多い。

4.2 女性視点の映画

『胡不帰（1958）』の主演者芳艷芬は香港だけでなく、広東省、マカオ、東南アジアにも多くのファンを持ち、「花旦王」と呼ばれるまで人気な粵劇、映画の女優である。しかも、植利影業公司是芳艷芬が創立した会社である。それゆえに、『胡不帰（1958）』は芳艷芬を中心にするべく脚本にさまざまな工夫が施された。それに対し、林家声はまだ経験の浅い男優の卵であった。また鳳凰女も若くて人気があったため、

彼女が演じた脇役の場面も粵劇より多い。粵劇の原作やほかの『胡不帰』映画と比べて、『胡不帰（1958）』は明らかに女性に重点を置かれている。女性の視点から見たり語ったりする画面は多く、女性の心理や運命を詳細に描く部分も多く見られる。

前に述べたように、映画の冒頭は印象的な改編であり、内容は粵劇の第4幕「誤診・別居」から取っている。しかし、はじめからの5分間はほとんど芳艷芬の独唱である。最初の画面には庭園の風景が映されており、「深秋の庭園に落花ばかり、花片は流され、定かでない。揺れて消えると二度と見えない。」という歌から始まった。この歌について、「映画の冒頭では、みずからの境遇を訴える歌が独唱されるが、それはとても柔らかい印象を与える新曲であり、感動的である。芳艷芬が歌うと、いかんともしがたい境遇の感じがよりいっそううまく表現されることとなった。」¹¹と評価されている。それからカメラは室内に移動し、病気の趙顰娘が登場してくる。この部分に趙顰娘のほかに女召使と姑の文母が登場している。男の主人公は姿を表していない。

ヒロインが如何に家を追い出された部分は簡略化され、粵劇の第2幕「結婚のご承知」は削除された。それゆえに、文萍生が趙顰娘を守り、家に連れて行く部分、母親の反対を押し切って結婚を認めてもらった部分も削られ、男らしさは十分に演出できなかった。しかも、妻と別れるシーンでこっそり泣いているところと、「哭墳」の部分の出演は弱気で受動的な印象を与える演出となっている。趙顰娘の父親を演じる黄楚生の登場場面は原作より多くなっており、主にプロットをつなぐ役割を果たしている。もう1人男の役柄に方三郎が登場している。原作の中では陰謀を企んだ悪玉であるが、登場場面は少なくなり、存在感も薄くなったのである。

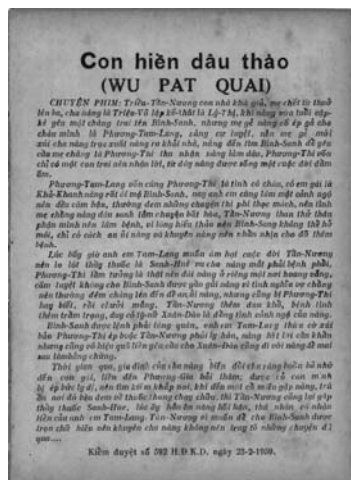
男の役が多少削られたに対し、ヒロインのほかに、女性は粵劇よりもっと活躍できるようになった。先述したように、文萍生の母親は嫁さんをいじめる悪玉という設定であるが、嫁の趙顰娘の病気回復を祈る部分や、趙顰娘の父親に謝る部分を見ると、悪玉でありながら優しい一面も見せている。もう1人脇役に方三郎の妹方可卿が登場している。文萍生との結婚を望んでいたものの、趙顰娘に邪魔にされて失敗してしまった。『胡不帰（1958）』の中では、方可卿は方三郎の役を分担しており、しばしば文萍生の母親に告げ口を言う。しかし、最後に医者がわざと誤診したという真相を打ち明けたのも方可卿である。自分の幸福を求めただけに悪事を働かせる女性という平板なイメージが強かった原作とは違って、映画は立体的な女性像を提示しているように思われる。

¹¹ 李焯桃（2003）『粵語劇曲片回顧』香港电影资料馆，118

映画『胡不帰（1958）』の内容や役の調整などを見れば分かるように、女性の視覚や感情の変化などが重視されるようになった。ヒロインは一人称で語り、運命のいたずらを受け入れるとき、悩んでいた主人を慰めた。最後の主人との再会のシーンでは、粵劇の名曲「胡不帰」の後、趙顰娘も新創作の曲を歌った。女性の主体性は比較的に強く見られ、ある程度原作に描かれたような、理不尽な待遇を堪え忍んだり、怒りをこらえてじっと我慢したりする女性のイメージとは多少異なる印象を抱かせる。特に女の脇役が個人の幸福のために不和の種を蒔き、また同情心のため真相を語る部分を見れば、女性が積極的に自分の運命を変えようと努めている姿は印象的である。

新しく発見されたパンフレットの最後のページにベトナム語の紹介文が掲載されている。タイトルは「Con hiền dâu thảo（児賢媳孝）」である。

（図3：映画パンフレット『胡不帰（1958）』のベトナム語紹介文）



紹介文の内容は映画とほぼ一致している。ヒロインの身の上から語り出し、彼女の悲惨な運命に重点を置いている。ところが、原作と若干異なるところも見られる。たとえば最後の段落でヒロインの父親は医者を呼んできて、その医者は前に賄賂を受け取ってわざと誤診した「生輝」¹²であった。医者は反省して真相を語った。それに対し、映画『胡不帰（1958）』の中で真相を打ち明けたのは方三郎である。なお、字数制限があったためなのか、紹介文に最後の墓場での再会は省略されている。紹介文の下に出典が明記されており、「査驗 H.D.K.D 第 592 号文献 1959 年 2 月 23 日」と書いてある。ベトナム語紹介文がパンフレットに載せられていたという事実は、映画パンフレットの対象が香港だけでなく東南アジアの視聴者なども想定されていたということである。

¹² ベトナム語の表記は「Sanh-Huê」である。映画に登場している医者は「生華佗」であり、「生きている華佗（伝説上の名医）」というあだ名であったが、ベトナム語紹介文の作者は「佗」を見落とし、「生華」を医者の名前に理解したらしい。

5. おわりに

前述したように、デイヴィッド・ダムロッシュは「世界文学とは、翻訳を通して豊かになる作品である」と指摘している。徳富蘆花作『不如帰』はさまざまなメディアを通して、中国で受容されている。翻訳、演劇で受容された『不如帰』は楕円のもう1つの円心となって、作品は東アジアでの読者層を増やしていた。

特に 1940 年代に入ってから、新劇『不如帰』の影響を受けた粵劇『胡不帰』は相次いで香港で映画化され、脚本家たちは『不如帰』のプロットは、比較的自由に削ったり、膨らませたりした。これらの作品は、原作の内容や表現を忠実に再現することより自国の読者の受容を考慮して、原作に新たな生命力を吹き入れたと言える。20 世紀の初頭に『不如帰』が中国に紹介された以来、新しい円心となって、東アジアで受容の「波紋」を広げた。『不如帰』は翻案を重ね、長い旅を経て、今日まで受容されてきた。今回発見した 2 冊の映画パンフレットを分析し、2 つの映画作品に関連する情報を明らかにするが本論文の主旨である。

参考文献

- 『新胡不歸』（小冊子、出版年月不詳）
『胡不歸』（小冊子、出版年月不詳）
徳富蘆花（1905）『不如歸』民友社
徳富蘆花（1914）：『不如歸』（林紓、魏易訳）商務印書館
李門（1981）『粉墨集』广东人民出版社
郭秉箴（1988）『粵劇芸術論』中国戯劇出版社
頼伯疆（1993）『薛覚先芸苑春秋』上海文芸出版社
魯金（1994）『粵曲歌壇話沧桑』生活・读书・新知三联书店
香港粵楽研究中心（1994）『紀念何非凡没後 14 年』
酈蘇元、胡菊彬（1996）『中国無声電影史』中国电影出版社
余慕雲（1998）『香港電影史話』（第 3 卷）香港、次文化堂
余慕雲（2000）『香港電影史話』（第 3 卷）香港、次文化堂
崔光明（2000）『紀念何非凡没後 20 年』
H・R・ヤウス（2001）『挑発としての文学史』（轡田収訳）岩波現代文庫
香港电影资料馆（2003）『香港影片大全』（第 4 卷）
李焯桃（2003）『粵語劇曲片回顧』香港电影资料馆
邓兆华（2004）『粵劇与香港普及文化的变遷——〈胡不歸〉的蛻変』香港中文大学音楽系粵劇研究
計画
吴庭璋（2006）『粵劇大師薛覚先』广东人民出版社
羅麗（2007）『粵劇電影史』中国戏剧出版社
蔡孝本（2008）『粵劇』中国文聯出版社
劉燕萍（2010）『女性与命運 粵劇・粵語戯曲電影論集』香港大学出版社
デイヴィッド・ダムロッシュ（2011）『世界文学とは何か』（秋草俊一郎ほか訳）国書刊行会
楊文瑜（2015）『文本的旅行——日本近代小説「不如歸」在中国』華東理工大学出版社
楊文瑜・鄒波（2016）「『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述に関する考察」『東アジア日本語教育・
日本文化研究学会』19 号, 175-196